

学生が伸びる学び方

## 大学選択

### 新たな視点



## 今号の視点

# 学習意欲を高めよう

# 初年次から工夫する大学

入試を突破して入学したからといって、必ずしも学習に意欲的な学生ばかりではない。特に不本意入学生が多いと思われる中堅以下の大学では、学習意欲の向上は大きな課題だ。今号は、入学直後から、学習の動機付けに積極的にかかわる二つの大学を紹介する。

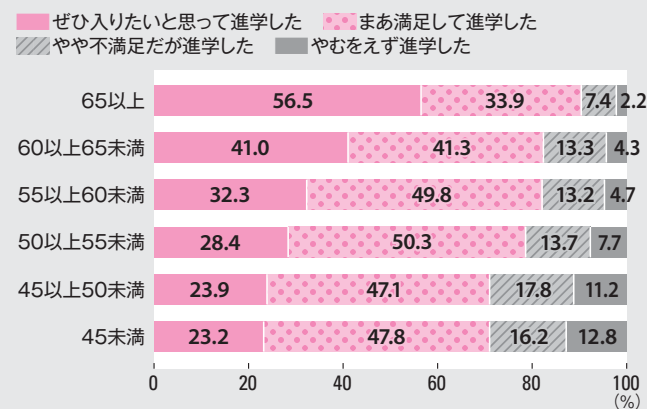
## 早い段階で 学びへの動機付けが必要

大学進学率が50%を超え、えり好みをしなければ大学に入学できる全入時代となった。高校生にとって大学入試だけでは学習への動機付けにはなりにくく、目的意識が明確な学生ばかりが大学に進学するわけではない。それは、「やや不満足だが進学した」「やむを得ず進学した」という学生が、どの入試難易度の大学にもある一定数いることから明らかだ(図1)。

大学にとって、初年次から学生に働き掛けてモチベーションを高め、いかに充実した大学4年間で送らせるかは大きな課題だ。ところが、1、2年生の間は、大学の進路支援体制を「判断できない」と答える学生が約2割存在し、その工夫が学生には届いていないようだ(図2)。

今号は、学生の意欲向上に取り組む中堅大の中でも、入学直後から学生に働き掛けて意欲を高め、それと同時に意欲を行動に移せるような支援体制を整えている大学に注目した。

図1 大学進学に対する意識 (入試難易度別)



\*入試難易度は、在籍している大学名の回答があった2,614人(全体の64.2%)に対して、進研模試の入試難易度ランキングの偏差値を参考にして割り当てた。

図2 大学満足度：進路支援の体制 (学年別)

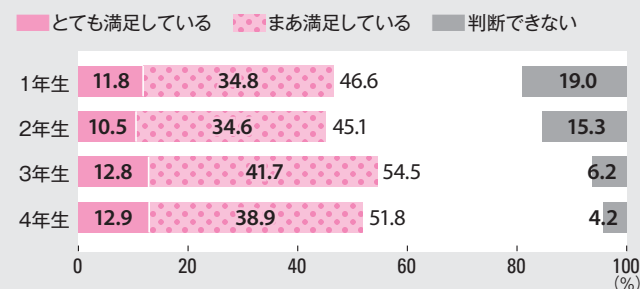


図1、2出典／Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査」(2008年)

## 入学式当日から継続して キャリア意識を高める

金沢星稜大  
キャリア開発

### ◎課題意識と狙い

金沢星稜大は経済学部と人間科学部を擁し、地域では中堅に位置する。国立大などの第1志望校に合格できずに入学した学生も多く、かつては挫折感を引きずって4年間を過ごす学生もいることが課題だった。また、元々は経済系単科大にもかかわらず、例えば簿記検定試験の資格取得者は1学年で数人であるなど、大学の特色を生かせていなかった。星稜エクステンションセンターの友部充洋課長は次のように話す。

「公務員や税理士を目指したいと思っても、学内に支援プログラムはなく、専門学校に通わないと合格は厳しい状況でした。不本意入学生生の意欲を高めつつ、その意欲に応えるための支援体制を学内に整える必要があります」

### ◎取り組み内容

学習への動機付けの取り組みは入学式当日から始まる。新入生とその

保護者を対象に、卒業生の就職状況を約2時間かけて説明。続いて支援プログラムを紹介する。入学部長の村井万寿夫教授は次のように話す。

「学生と保護者に、自身の置かれた状況の厳しさを伝えて危機感を持たせつつ、本学のプログラムを活用すれば就職活動で勝負できる力が付くと伝えていきます。受験では第1志望校不合格という挫折を経験したけれども、4年間の過ごし方次第で逆転は可能だと強調しています」

プログラムの柱は、1・2年次の「基礎ゼミナール」と、課外講座「キャリア・ディベロップメント・プログラム(CDP)」だ(図3)。

基礎ゼミナールでは、専門教育を受ける前段として身に付けておきたい知識・技能を指導する。経済学部の場合、1年次の「基礎ゼミナールI」で講義の受け方やレポートの書き方など大学での学び方全般を指導し、2年次の「基礎ゼミナールII」では金融論や財務分析などを学ばせつつ専門教育への導入を図る。また、「ビジネス基礎演習I・II」にも所属することで、計2人の担当教員から手厚く指導を受ける。

CDPは難関試験合格を目指すための講座で、人間科学部を含めた2学部で「公務員」「税理士」「小学校教員」「総合」の4コースがある。正課とは別に夕方から夜にかけて開講する有料のプログラムだ。特色は、受講は1年次からのみとし、高校段階の履修内容の「学び直し」を含め、4年間かけて基礎から積み上げるカリキュラムとしている点だ。

「公務員コース」の場合、1年次は基礎学力、2年次から法律などの専門科目、3年次からは職種別対策に段階的に進み、公務員試験突破の実践力を付けていく。2005年度の開始以来、CDPの修了生は3期生まで出ているが、公務員試験に延べ59人が合格するなどの実績が出ている。今はCDPの受講を目的とした入学者もいるほどだ。

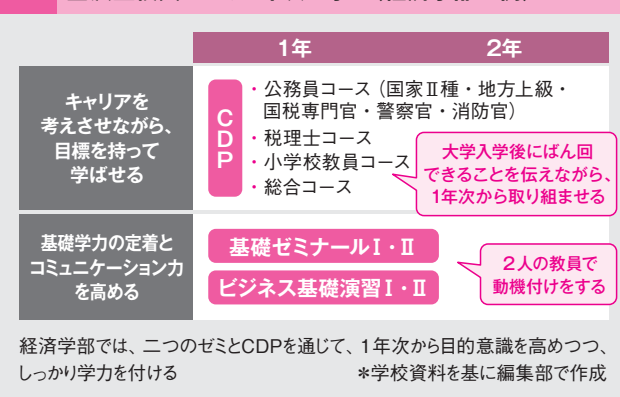
大学入学時に目標がはっきりしていない学生に対しては、基礎ゼミナールで月1回、キャリア教育を行い、キャリアビジョンを考えるプログラムのある「総合コース」で職業研究などを行いながら、将来への意識を育成している。

### ◎成果と課題

簿記検定試験の受験者は150人以上に上り、公務員や税理士、小学校教員を目指す学生も増えた。新入生の半数以上がCDPを受講し、夜も学内で自習する姿が見られる。

途中で目標が変わりCDPの受講をやめる学生もいるが、そうした学生も新たな目標に向けて頑張っている。CDPで1年次に基礎学力をしっかりと付けていることが、目標実現を後押ししているという。経済学部4年の紺野螢子さんは、「第1志望は国立大で、本学は併願校でした

図3 金沢星稜大 1、2年次の学び(経済学部の例)



が、『公務員コース』で同じような境遇の友だちと出会い、励まし合っ  
て頑張れました。目標が変わりCD  
Pは2年生で終了しましたが、それ  
までに培った力のおかげで希望の企  
業に就職できました」と話す。

今後の課題は、現状の支援体制か  
らこぼれている学生をいかに支えて  
いくかだ。11年度には教職員共同プ  
ロジェクトを立ち上げ、消極的な学  
生でも自己効力感を高められるよう  
な取り組みを模索していく。

### 自校に誇りを持つことで 学生に自信を持たせる

麗澤大  
自校教育

#### ◎課題意識と狙い

不本意入学生の支援には、都市部  
の中堅大も力を入れている。千葉県  
にある麗澤大は、学生と教職員の距  
離が近く、面倒見が良いといわれる  
大学だ。しかし、学部増設等で大規  
模化し、かつては自然に出来ていた  
学生支援を以前より工夫する必要が  
出てきたと井出元学長補佐は話す。  
「第1志望の学生にも不本意入学  
生にも、重要なのは『麗澤大に来て

良かった』と思える経験をしてもら  
うことです。それは授業だけにな  
く、大学での全ての活動に言えるこ  
と。本学の良さを伝えつつ、学内外  
の制度を活用し充実した4年間を送  
るための支援を重視しています」

そのためには、学生の課題意識を  
1年次から掘り起こすことが必要だ  
と、キャリアセンター長の真殿達  
教授は話す。

「入学直後から社会で活躍する卒  
業生の姿を見せることは、社会との  
かわりを考えるきっかけになりま  
す。この大学でしっかり頑張れば『自  
分にも出来る』という自信を付ける  
ことにもつながるのです」(図4)

#### ◎取り組み内容

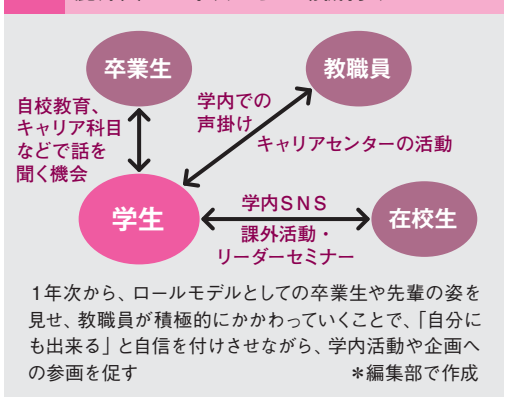
自校の良さを伝えるために強化し  
ているのが自校教育だ。まず、新入  
生全員参加のオリエンテーション  
キャンプでは、建学の精神や大学の  
歴史などを伝える。そして、1年次  
から選択できるキャリア科目「麗澤  
スピリットとキャリア」では、大学  
の歴史や創立者の人生などを学び、  
キャンパスを散策する。自校教育の  
目的を井出学長補佐はこう話す。

「自分がどんな大学に入学したか

を確認し、大学で学ぶ意義を意識す  
ることが、本学での学びの出発点に  
なります。最終的には大学生生活を自  
分の言葉で語れる学生を育てたいと  
考えています。そのため、オリエン  
テーションキャンプや『麗澤スピ  
リットとキャリア』で、教壇に立つ  
のは卒業生です。同じ環境で学んだ  
卒業生に、本学の歴史や良さ、自分  
が何を学んだのかを語ってもらって  
います。就職活動をする则自分の大  
学について自分の言葉で語れる必要  
性を痛感するため、卒業生は真剣に  
話してくれます」

「本学は小規模校であり、卒業生  
は同窓生が少ない中で社会で頑張っ  
ています。転職での苦労話などもし  
てもらい、いろいろな生き方がある  
ことを伝えていきます。学生は将来の  
自分と重ね合わせているためか、真  
剣に耳を傾けています」(真殿教授)  
一方、リーダー格の学生には先輩  
との縦のつながりだけでなく、横の  
関係もつくってほしいと、伝統的に  
「リーダーセミナー」を行っている。  
学友会役員や部活動の部長、サーク  
ルのリーダーや寮長ら60〜70人が集  
まり、2泊3日の研修を年2回行

図4 麗澤大 1年次からの動機付け



う。ディスカッションなどを通し  
て、1回目は悩みを共有し、2回目  
はリーダーとして得たものや後輩に  
引き継ぐことなどを話し合う。

こうしたさまざまな活動を下支え  
しているのが、学生に対する教職員  
の密な声掛けだ。そこには全寮制の  
小規模大だった伝統が息づく。真殿  
教授は「自分のゼミの学生や知り  
合った学生の姿を学内で見かけない  
時は、何度も電話を掛けます。これ  
は甘やかすではなく、きちんと話を  
聞き、対話することが教育にもなる  
と捉えているからです」と話す。ポ  
ランティア団体立ち上げなどにか  
わった外国語学部4年生の関口和宏



友だちとの目標共有と、  
励まし合いが原動力



金沢星稜大人間科学部  
経済学科4年  
竹口しのぶ  
(富山県立滑川高校卒)

私は高校生の頃から小学校教員を目指していましたが、本学は第1志望校ではありませんでしたが、高校の先生に「大学は目標をかなえる通過点ではない」とアドバイスを受け、CDPの「小学校教員コース」の受講を目的に入学を決めました。

1年生の時には4コマの授業を受けた後、すぐにCDPの講義というハードな日もあり、授業との両立は大変でした。入学したばかりで「頑張るぞ」と意欲満々でしたが、2年生、3年生と学年が上がっていくとモチベーションが下がりが気味になりました。そうした時は友だち同士で「一緒に頑張ろう」と声を掛け合い、乗り越えました。今は、受講生同士で模擬授業を見合うなど、目標に向けて協力し合っています。目標が同じ仲間がいるのは心強いです。ゼミナールでは先輩とかかわる機会がたくさんありました。3年生の時には、4年生の先輩がCDP以外の時間も熱心に勉強している姿をよく見かけました。そうした先輩から受けた影響も大きかったと思います。

入学時の職員の声掛けが  
大学生活を変えた



麗澤大経済学部  
経済学科4年  
松尾高治  
(千葉県・私立二松学舎大学附  
属沼南高校(現二松学舎大学  
附属柏高校)卒業)

正直に言って、本学は併願校で、入学当初は暗い気持ちでした。1年生の時はインカレサークルなど学外の活動に参加していませんでした。しかし、その間も頭の隅にあったのは、履修登録を提出した際に職員の方から「やりたことがあるなら何でも相談に乗ります」と言われたことでした。2年生の冬、社会とかかわりを持てるような体験をしたいと思った時にキャリアセンターに足を運んだところ、NPO主催のインターシッピングや自治体による学習塾の経営体験を紹介してくれました。大学がどんなチャンスを与えてくれたことが、私が変わるきっかけになりました。

就職活動では大学での充実した経験をしっかりと話すことが出来、第1志望の企業から内定をいただきました。1年生の時に職員の方から声を掛けられていなければ、今のようにはなれなかったと感じています。今はもっとこの大学を良くしていきたいと、学友会の役員になり、学内フリーペーパーの発行などを担当しています。

さんは、「教職員の方とは学内のオーブンスペースでもすぐ雑談になるくらい距離が近く、私が団体を設立したいと考えた時も気軽に相談し、動くことが出来ました」と語る。

◎成果と課題

「学生自らボランティア活動を始めるなど、学内の活動が活発になり、卒業生が気軽に遊びに来ることが多くなってきました」と真殿教授は学内の変化を語る。就職実績も堅持しており、自分の大学と大学生活を具体的に語れる学生が増えたことも一因ではないかと分析する。

課題は卒業生との連携の強化だ。卒業して間もない世代とはかわわりが深まっているが、上の世代も含めて組織化していきたい考えだ。

進路指導に生かす

前向きな学生ばかりでない現実に向き合い、対策をしているか

不本意入学の学生、目的意識の低い学生に、大学進学の意味や目的を見いだし、意欲を高める工夫はどの大学でも重要だ。とりわけ入学直後の働き掛けは効果が高いようだ。金沢星稜大では、目標が変わり

CDPを途中でやめた学生も、主体的に学び続けて納得できる就職先を手にする例が目立つという。学生によつては、学びの意欲が湧くまで時間がかることも考えると、出来るだけ早いうちに手立てを講じる必要があるだろう。

「前向きな理由で入学してきた学生ばかりではない」という現実には真摯に向き合い、そうした学生を育成する施策を講じている大学かどうか、併願大を検討する際にはこうした方針を確認する必要があるのではないかと。大学資料を見れば、大学の取り組み内容が分かる。更に、オンラインキャンパスで学生と教職員の関係を観察することによって見えてくることもあるはずだ。

「どのような方法で育てているのか」「4年間を通じて継続的に意欲を高める機会を提供しているか」という視点で大学を見れば、一歩踏み込んだ志望校選びが出来そうだ。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎ 今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。  
e-mail: view21\_since-1975@mail.benesse.co.jp